

多重関係

一般にはあまり知られていないことかもしれませんが、カウンセリングには治療構造とあって、いくつかのルールや制限が存在します。カウンセリングは無制限に要求や要望を受け入れる場ではありません。社会のルールによって我々が守られているのと同様に、カウンセリングにも相談者を守るためにルールが欠かせません。ルールといっても「時間」や「場所」という相談室を利用する際の枠組み程度のものです。大袈裟に考える必要もないことかもしれませんが、実はこうした枠があるからこそ相談者は自由に表現することができると言われてますし、カウンセラーが安定して相談者の話に耳を傾ける上においても不可欠なものです。そのためカウンセラーは常に枠組みを維持し、相談者の自由と安全を確保しなくてはなりません。

外にもカウンセラーが相談者と関わる上で重要なポイントをまとめたものに、職業倫理の七原則（金沢，2006）というものがあります。



- (1) 相手を傷つけない、見捨てない
- (2) 専門的な行動の範囲内で、相手の健康と福祉に寄与する
- (3) 相手を利己的に利用しない
- (4) 多重関係を避ける
- (5) 一人ひとりを人間として尊重する
- (6) 秘密を守る、秘密保持
- (7) インフォームド・コンセントと相手の自己決定権の尊重
すべての人を平等に扱い、社会的な正義と公正・平等の精神を具現する

この中で普段あまり聞きなれない「多重関係」というものがあります。困っている人を放っておけないという使命感や、助けなくてはいけないという熱意は相談援助のモチベーションになります。それが親しい友人や同僚であればなおの事でしょう。こうした「カウ



ンセラー」と「相談者」の関係とは別に、友人や同僚といった人間関係にあることをカウンセリングの分野では「多重関係」と言います。日常ではむしろ親しい関係にある者同士が支え合うのはよいと考えられています。ピアカウンセリング（同じ立場にある仲間（ピア）同士で行われるカウンセリング）はその典型でしょう。ではなぜ、職業倫理では「多重関係」を避けることが言われているのでしょうか。

ひとつにはカウンセリング関係の深まりと個人的感情とが混同される危険があるからだと言われてます。例えば、相談者のことを思うあまり相談の枠組み（時間や場所）を無視して会おうとしたり、相談者の側もそうした要求に対して、本来の友人同士あるいは社会的関係が悪化することを恐れ、拒み切れず受け入れてしまうことがあるかもしれません。これでは相談をする側の主体性や自発性が損なわれるばかりか、相談者の心を深く傷つけることにもなりかねません。助けたいという思いが強すぎても、弱すぎても心理的援助は成り立ちません。バランスが大事なのですが「多重関係」はこうしたバランスを狂わせるリスクがあるということです。

カウンセリングは話をするための場所ではありません。相談者が安心して人（カウンセラー）と関わる場所として、これからも一人ひとりのニーズに丁寧に応じていきたいと思えます。

溝口盛治（臨床心理士・公認心理師）

